# わたしたちは「存在」がどういう意味のものか知っている

## ～ハイデガー『存在と時間』序説第一章の分析

2024 年 1 月 14 日　宮国淳
http://miya.aki.gs/mblog/
（※ 1 月 15 日に第 5 章を追加）

本稿は、ハイデガー『存在と時間（上）』（桑木務訳、岩波書店）の序説第一章（17～39 ページ）の批判的分析である。ハイデガー理論の前提そのものの否定、「存在論」が虚構であることを示すものに他ならない。

＜目次＞　() 内はページ

１．存在物とは知覚される、されうるもの　(1)
２．知覚しているからこそ調査研究できる　(2)
３．存在を問う存在を設定することは循環論理・循環論証である　(4)
４．「現存在」も「実存」も学問に先立つものではない：存在論という“虚構”　(6)
５.「私」は「ただたんに他の存在するものの間にだけ現れるような、存在者」である　(7)
＜引用・参考文献＞　(8)

## １．存在物とは知覚される、されうるもの

*「存在」は、存在するものとしては捉えることができません。*（ハイデガー、20 ページ）
*「存在（ザイン）」は、存在するもの（ザイエンデス）といったようなものではない*（ハイデガー、20 ページ）
*存在は、いずれにせよ存在するものの存在です。*（ハイデガー、29 ページ）

・・・「存在」というのは”言葉”である。言葉は言葉であり存在物ではない。しかしいまここで知覚されている物は”存在するもの”である。ハイデガーは「存在」という言葉を一つの”概念”として実体化し、そこに何かしらの”意味”をあてがおうとしているのだ。
ここが明らかな間違いの始まり、「概念の実体化の錯誤」なのである。

*わたしたちは、「存在」がどういう意味のものか、知りません。*（ハイデガー、23 ペー

ジ)

・・・本当に知らないのであろうか？ ハイデガーの勝手な決めつけなのではないだろうか。そこに見えているもの、あるいは触れることのできるもの、それは「存在物」であり、それが「存在するもの」に他ならない。

私たちは知覚することでその「存在」を確かめている。見えなくても触れることができる、今ここで観測できなくても、他のだれかが観測している、肉眼で見ることができなくても、何らかの機器を用いて観測することができる、それらがまさに「存在する」ということなのだ。

それを、

> *だれもがもっているいいかげんな存在了解の解釈は、存在という概念が形成されてはじめて、必要な導きの糸を手に入れます。*（ハイデガー、24 ページ）

・・・というふうに「いいかげんな存在了解」と決めつけ、私たちは「存在」というものを知らないということにしてしまっているのだ（このあたり、ソクラテスやプラトンの詭弁に通じるものがあるように思える）。

この詭弁に踊らされないようにする必要がある。**「概念が形成されて、はじめて必要な導きの糸を手に入れます」というのが、まさに「概念の実体化の錯誤」の入り口**なのだと言えよう。

> *しかし「<存在（ザイン）>とはなんであるか？」をたずねるときすでに、わたしたちは「である（イスト）」ということがなにを意味するのかを、概念的に確定することをしないで、「である」が分かっています。*（ハイデガー、23 ページ）

・・・「概念的に確定」というよりも、「存在する」とは私たちの具体的経験において、いかなる状況のことなのか、「存在」という”言葉の意味”は、まさにそういうことなのである。

## ２．知覚しているからこそ調査研究できる

> *問うこと（フラーゲン）はすべて、探し求め（ズーヘン）ることです。探し求めることはすべて、探し求められるものから、予（あらかじ）め方向を決定されています。問うことは、存在するものが「あること（ダースザイン）」、また「こうあること（ソーザイン）」において、存在するものを認識しながら探求することです。*（ハイデガー、22 ページ）

このような考え方はフッサールの

> *学問は、前述定的に見て取られたものを、完全にそして明証的な適合性において表現する述定を目指している*（フッサール、37 ページ）

・・・という学問観と重なっているようにも思える。学問とは事物の性質をより正確に明らかにするというような、非常に限定された学問観である。

しかし実際には学問とはそういった内容のみでなく、事物と事物、事象と事象との因果関連を確かめたり探求したりするものでもある。このあたり言葉の意味と因果関係（機能的意味）とが未分離、混同されているということと繋がってくるのではなかろうか。（※ 注）

> *問うことは、何かを問うこととしてその「問われていること」をもっています。何かを問うことはすべて、なんらかの仕方において、何かについて問いかけることです。問いには、問われていることの他に、「問いかけられているもの」があります。*（ハイデガー、22～23 ページ）

・・・このあたりも、フッサールの「*およそいかなる意識体験も、それ自身で何ものかについての意識である*」（フッサール、68 ページ）に対応しているように思える。ではその対象は何かと言えば、究極的には知覚経験に基づく何らかの事物・事象にほかならない。

つまり、

> *「<存在>とはなんであるか？」とたずねるときすでに、わたしたちは「である」ということがなにを意味するのかを、概念的に確定することをしないで、「である」が分かっています。*（ハイデガー、23 ページ）

・・・というのは、私たちが「存在」がどういうものか知らないのではなく、調査研究となる対象を観察する、つまり知覚できているその事実こそが「存在している」ということなのだ、それは自明のことなのだと知っているということなのである。

（※ 注）「*学問は一般に、もろもろの真なる命題の基礎づけの連関の全体、と規定されています、しかしこの定義は完全ではないばかりでなく、学問の真の意味にもあてはまりません*」（ハイデガー、34 ページ）とあり、因果関係を全く無視しているわけではないようだが、因果関係とは何か、その学問における位置づけとはどういうものであるか、正確に捉えることができているのかどうか甚だ疑問である。

## ３．存在を問う存在を設定することは循環論理・循環論証である

*完成せらるべき問いにおいて、問われていることは、存在であり、これは存在するものを存在するものとして規定し、それがどのように説明されようとも、存在するものがその地盤の上で、すでに了解されているところのものです。存在するものの存在は、それ自身、ひとつの存在するものでは「あり」ません。*（ハイデガー、24～25 ページ）

・・・これは一種の”言葉の遊び”にすぎない。存在するものと思われるのは、究極的にそれが知覚される（されうる）からであり、さらにそこに”地盤”を求めようとすると循環論理に陥ってしまう。知覚する私（あるいは人間）という”存在”を前提してしまうからだ。

しかしそういった客観的世界認識も、究極的には私たちの知覚経験を出発点とし、それらを因果的に関連づけることで導かれるものなのである。つまり、すべての始まりはただ現れる具体的経験（知覚経験含む）であるといえよう。

”知覚”と呼ぶとそこに知覚する主体があるように思われてしまうが、それはただ”現れる”具体的事象であり、主体というものはそこから因果的に導かれるものである。とりあえず知覚経験、具体的経験と呼んではいるが、そこは誤解しないでいただきたい。**”知覚する主体があるから知覚経験が生じる”というのではなく、”知覚経験が現れていることから知覚する主体というものが（因果的に）想定される”**ということなのである。

（話は戻るが）ハイデガーは先に述べた循環論理を覆い隠すため、そこで「存在するものではない」存在という（明らかに矛盾する）論理を展開しようとしてしまったのである。

*存在への問いがはっきりだされ、そしてその問い自身を完全な見通しにおいて押し進めてゆくとすれば、この問いの仕上げは、いままでのいろいろな説明によると、存在を眺めやる（ヒンゼーエン）仕方、ならびに意味の了解と概念的把握の仕方の究明、模範的な存在するものを正しく選びだす可能性の用意、この存在するものにズバリと到達する仕方の精選などを必要とします。*（ハイデガー、26 ページ）

・・・「存在するものにズバリと到達する仕方」とは、ズバリ知覚することである。そこに”模範的”も何もない。まるでプラトンのイデア的なもの（つまり虚構）を探そうとしているように見受けられるのだがどうだろうか？ 存在という言葉の「意味」を知るために「眺めやる仕方」というものも関係はない。そのような**「仕方」など私たちの具体的経験として現れていない。**現れるのはただの知覚経験（そして言語）であるにすぎない。

「眺めやる仕方」というのは、「眺める人」「対象物」の「存在」を認め、それぞれのより詳細な客観的・因果的分析を積み重ねた上で想定できるものである。

*なにかへと眺めやり、なにかを掴み、また捉え、選び、近づくことは、問うことの構成的な関わり合いであって、これはすなわち、ある一定の存在するものの、つまりわたしたち問う者それ自身であるところの存在するものの、在り方(ザインスモーディ)ですらあるのです。*（ハイデガー、26 ページ）

・・・繰り返すが、私たち問う者それ自身の「在り方」というものは、私たち人間の「存在」というものが知覚経験された上で成立するものである。**存在に先んじる問いでは決してない。**問いの「*機能と意図と、そしてその動機*」（ハイデガー、29 ページ）についても同様である。これも当然存在の認識に先んじるものではない。人間という存在物を前提とした上で因果的に推測される事柄なのである。

*問うという存在可能性をもっているこの存在するものを、わたしたちは現存在(ダーザイン)〔人間存在〕という述語で表わします。*（ハイデガー、27 ページ）

*存在するもの（現存在）を、その存在に関して、前もって適切に明らかにしておくことを要します。*（ハイデガー、27 ページ）

・・・ハイデガーはこれらのプロセスには「*循環論証*」（ハイデガー、27 ページ）はないと言うが、実際それは循環論証、まさに「*不生産的*」（ハイデガー、27 ページ）でしかない。現存在とは、この循環論証を覆い隠すための仮説概念であるとも言えるのではないだろうか。

*存在するものは、そのばあい、前もって存在の意味についての明確な概念が取り扱われていることなしに、その存在について規定されることができます。*（ハイデガー、27 ページ）

・・・結局、それらもハイデガーの言う「*このいいかげんな、あいまいな存在了解*」（ハイデガー、24 ページ）を出発点にした上で類推（しかも正しくない）されているものなのである。

## ４．「現存在」も「実存」も学問に先立つものではない：存在論という“虚構”

数学における”*形式主義と直観主義の論争*”（ハイデガー、30 ページ）も、結局は言葉（数字や記号も含む）と経験との関係性を見誤っているために生じているものである。物理学の問題も究極的には数学の根拠づけにも本来左右されるものである。ただ、様々な新しい見解が出て論争が生じることは決して学問の”危機”などではない。（生物学その他に関しては的外れで論外なので割愛）

> *学問は、人間のもろもろの関り合(フェアハルトゥング)いとして、この存在するもの（人間）の在り方をもっています*（ハイデガー、34 ページ）

・・・という考え方は、まず事物、そして人間の存在を前提とし、人間の様々な学問業績を事後的に分析した上で、想定・想像されるものである。まず現れる事象があって、それらを因果的に分析した上で想定されるものなのである（そこに客観性があるのかどうかは怪しいのだが）。ハイデガーの考え方は事実と反し、ひっくりかえってしまった認識なのである。

学問も、究極的には言葉と知覚経験とのそれ以上論理で説明できない、しかし素朴な関連づけ（ハイデガーによるといいかげんであいまいな存在了解）を最終根拠にしているのである。いくら物事を厳密に定義しようとしても、最終的にその説明できない場所に行きつく。

いずれにせよ、ハイデガーが「*実存*」（ハイデガー、35 ページ他）と呼ぶものも、結局は学問その他人間の知的営みを前提とした上で、自らがどのような態度をとるのか、自らをどのように捉えるのか、自らの社会におる役割をどう考えるのか・・・といった後付けの思考なのである。

そして、存在の認識や存在物の分析に関して、そこに「こころ(アニマ)」（ハイデガー、38 ページ）というものを想定する必要もない。

西田は『善の研究』の中で次のように述べている。

> *我々の知る所は知情意の作用であって、心其物ではない。*（西田、65 ページ）

> *ただ我々をして物心其物の存在を信ぜしむるのは因果律の要求である。しかし因果律に由りて果して意識外の存在を推すことができるかどうか、これが先ず究明すべき問題である。*（西田、66 ページ）

・・・「心其物」など具体的経験として現れてなどいない。西田の指摘はもっともである。西田は「物」だけでなく「心」というものについても「因果律に由りて」推測できるものであると述べている。要するに「心」や「（物の）存在」というものは因果的に理解されるも

のである、これも当然のことであろう。

「*現存在の存在的＝存在論的優位*」（ハイデガー、39 ページ）というものも幻想であるし、そもそも存在論というものが虚構であるにすぎないのである。

## 5.「私」は「ただたんに他の存在するものの間にだけ現れるような、存在者」である

ハイデガーは「現存在」に関して次のようにも述べている。

> *現存在は、ただたんに他の存在するものの間にだけ現れるような、存在者ではないのです。むしろ現存在は自分の存在において、この存在そのものを問題とする存在するものであることによって、存在的に優位をみいだすのです。*（ハイデガー、354 ページ）

> *現存在〔人間存在〕が、それに対してこれこれの態度をもつことができ、なおかつつねになんらかの態度をとっていう当面の存在自体を、私たちは実存〔エクシステンツ〕と名づけます。そしてこの存在するものの本質規定が、事象的な何か（ヴァス）ということを示すことによってなされることができずに、むしろその本質は、自分の存在を自分のものとして存在させねばならないというところにあるのですから、現存在（ダーザイン）という名称は、純粋な存在表現として、この存在するものを記すために、選ばれたのです。*（ハイデガー、35 ページ）

・・・結局、**現存在という”言葉”に対応する「意味＝対象事物、事象的な何か」というものが指し示されることがない、ということをハイデガーが認めてしまっている**のである。つまり空虚なナンセンス、先に述べたように循環論証を覆い隠すための（覆い隠せないのであるが）仮説概念なのである。

つまり何の根拠も持たない、ハイデガーによる恣意的論理によって設定された概念なのだと言える。実際「*自分の存在を自分のものとして存在させねばならない*」要請などどこにもなく、私たちはただ「*他の存在するものの間にだけ現れるような、存在者*」としての「私」を見出すことができるだけなのである。

つまり、

> *現存在に属する存在了解は、「世界」といったものの理解と、世界のなかで近づきうる存在するものの存在の理解とに、根源を等しくして（グライヒウルシュプリュングリッヒ）触れています。*（ハイデガー、36 ページ）

・・・と考えるとき、実際に存在している世界と、そこに住んでいる存在する私との間の関連性やら自らの心持ち（動機）やらについて分析しようとしているのだといえよう。そしてそれらの分析も、根拠となる何らかの「事象的な何か」や具体的な知覚経験が現れることなしに遂行することは不可能なのである。

## ＜引用・参考文献＞


ハイデガー『存在と時間（上）』桑木務訳、岩波書店、1960 年
フッサール『デカルト的省察』浜渦辰二訳、岩波書店、2001 年
西田幾多郎『善の研究』岩波書店、1950 年


以下、本稿の内容に関連する拙著です。

動機や理念について考えるとはいかなることなのかについて：

**価値・理念について議論するとはどういうことなのか**

**～「なんのための」社会学か？ の批判的検証を中心に**

http://miya.aki.gs/miya/shakaigaku1.pdf

言葉の意味と機能的意味の違いに関して：

**『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』第Ⅱ部の批判的分析**

**～意義・価値理念と事実関係、法則と個性的因果連関、直接に与えられた実在と抽象に関するヴェーバーの誤解**

http://miya.aki.gs/miya/miya_report23.pdf

・・・の第Ⅰ章（6～11 ページ）

言葉の意味の究極的な説明できなささについて：

**哲学的時間論における二つの誤謬、および「自己出産モデル」 の意義**

http://miya.aki.gs/miya/miya_report17.pdf

プラトン・ソクラテスの詭弁について：

**「イデア」こそが「概念の実体化の錯誤」そのものである**

**～竹田青嗣著『プラトン入門』検証**

http://miya.aki.gs/miya/miya_report11.pdf

「本質」という倒錯

**竹田現象学における「本質観取（本質直観）」とは実質的に何のことなのか**

http://miya.aki.gs/miya/miya_report37.pdf